

アロマンの踊り、Pamporea を調べる中で、Aromân や、Vlah について、理解が曖昧である部分を解消・確認しようと、Gemini に問いかけ、私なりに突っ込みを入れてまとめてみました。間違いがありましたらご指摘いただけたらありがたいです。

2026/09/27 Denć wt. Gemini

## バルカン民族文化レポート: ヴラフとアロマン、その歴史と文化の交差点

バルカン半島の音楽や踊り、豊かな伝統文化に魅了されると、必ずと言っていいほど出会うのが「Vlah(ヴラフ)」や「Aroman(アロマン／アルーマニア人)」という言葉です。躍動感あふれる変拍子のステップや、魂を揺さぶる多声(ポリフォニー)の歌声。それらを生み出した彼らは、一体どのような人々なのでしょう。本レポートでは、音楽や踊りの背景にある「彼らのアイデンティティと歴史の謎」を、初心者の方にも分かりやすく紐解きます。

### 1. 言語別の名称一覧: なぜこんなに呼び名があるの？

「ヴラフ」や「アロマン」は、話す言語や住む国によって呼び方(綴り)が細かく異なります。まずはこの言葉のパズルを整理しましょう。

#### ①「Vlah(ヴラフ)」系の呼び方(広義のラテン系住民への他称・総称)

歴史的に周辺のエスニック・グループが「ラテン系の言葉を話す人々」を指して使った言葉です。

- 英語: Vlach / Vlachian
- セルビア語: Vlah(ヴラフ)／複数形: Vlasi(ヴラシ)
- ギリシャ語: Βλάχος(ヴラホス)／複数形: Βλάχοι(ヴラヒ)
- ルーマニア語: Vlah(ヴラフ)／複数形: Vlahi(ヴラヒ)

#### ②「Aroman(アロマン)」系の呼び方(南バルカンの特定民族の自称・他称)

彼ら自身の自称は、ラテン語の「ローマ人(Romanus)」に由来する「アルマニ」のような響きを持っています。

- アロマン語(自称): Armân(アルマーン)／ Rrămăn(ラマーン)
- ルーマニア語: Aromân(アロマン)／複数形: Aromâni(アロマニ)
- ギリシャ語(他称): Αρβανιτόβλαχοι(アルヴァニトヴラホス＝アルバニア系のヴラフ)など。単に「ヴラホス」と呼ばれることも多いです。
- 英語: Aromanian

### 2. 基礎知識: 「Vlah」と「Aroman」の本質的な違い

最も混同しやすい、この二つの言葉の定義と関係性を整理しましょう。

| 項目     | Vlah(ヴラフ)                                        | Aroman(アロマン／アルーマニア人)              |
|--------|--------------------------------------------------|-----------------------------------|
| 言葉の性質  | 周辺の民族から呼ばれる「他称・総称」                               | 自分たちの民族を指す「自称・固有の民族名」             |
| 意味するもの | バルカン半島～東欧のラテン系(ロマンス語派)言語を話す人々全般、または移動牧畜民のライフスタイル | ヴラフと呼ばれる大きなグループの中の「特定の具体的なひとつの民族」 |
| 使用する言語 | 文脈により異なる(ルーマニア語、アロマン語など)                         | 独自のアロマン語(アルーマニア語)                 |

### なぜ混同されるのか？

歴史的にバルカン半島の諸民族(ギリシャ人、スラヴ人、トルコ人など)は、「ラテン系の言葉を話し、羊を飼って山々を移動する人々」を誰彼構わず「ヴラフ」と呼んでいました。そのため、アロマン人も周囲からは「ヴラフ」と呼ばれ、自分たちでも対外的に「ヴラフ」と名乗ることがあったため、二つの言葉がごちゃ混ぜになって定着したのです。

## 3. アロマンの人々の「元の居住地」と人口動態

アロマン人のルーツは、古代ローマ帝国時代にバルカン半島南部でラテン語化した先住民(マケドニア人、トラキア人、ギリシャ人など)とされています。彼らの故郷は、ギリシャ北部のピンドス山脈を中心に、現在のアルバニア、北マケドニア、ブルガリアにまたがる山岳地帯です。

### ギリシャなどでの人口と現状

- 20 世紀初頭:バルカン半島全体で 50 万人以上のアロマン語話者がいたとされています。
- 現在の状況:同化が進み正確な人口把握は困難ですが、数万～数十万人規模と推測されています。特にギリシャでは、自身を「ラテン語を話すギリシャ人」と強く自認する人が多く、現在では日常的にアロマン語を話す若い世代が減少し、言語の消滅危機が指摘されています。

## 4. ルーマニアへ渡った歴史的経緯と「ドブロジャ」での試練

アロマン人の多くはバルカン半島南部に住んでいましたが、一部はルーマニアへと移動しました。これには 20 世紀前半の政治的・戦略的な背景、そして二度の大戦に挟まれた悲劇的な移住の歴史があります。

### ① ルーマニアによる「同胞」としての誘致(19 世紀末～1920 年代)

当時、建国して間もないルーマニア王国は、同じラテン系言語のルーツを持つバルカン半島のアロマン人を「海外にいる同胞(ディアスポラ)」とみなしました。ルーマニア政府はギリシャ国内などに「ルーマニア人学校」を建設し、彼らにルーマニア語教育を施して移住を促しました。

### ② 南ドブロジャ地方への集団移住(1920 年代～1930 年代)

第一次世界大戦後、ルーマニアは領土を拡大し、ブルガリアと接する南ドブロジャ地方(Cadrilater)を獲得しました。この地域の領有権を確実にするため(周囲のブルガリア人やトルコ人に対抗するため)、ルーマニア政府はアロマン人に土地や特権を提示し、積極的な入植(植民)を行いました。ギリシャ国内の政治的混乱や貧困から逃れるため、多くの家庭がこの呼びかけに応じ、新天地へ集団移住しました。

### ③ ブルガリアからの「引き上げ」という試練(1940 年)

しかし、彼らの安住の地は長く続きませんでした。1940 年、クラヨヴァ条約によって南ドブロジャ地方がブルガリアへ返還されることになったのです。これに伴い、大規模な「住民交換」が行われました。南ドブロジャにいたアロマン人(およびルーマニア人)は、家や土地をすべて捨てて、ルーマニア領として残った北ドブロジャ(現在のコンスタンツァ県やトゥルチャ県など)へ強制的に引き上げる(移住する)ことを余儀なくされたのです。

現在のルーマニアの音楽・ダンスシーンで「アロマンの伝統」がドブロジャ地方に深く根付いているのは、この激動の強制移住の歴史の結果です。

## 5. 「アルヴァニトヴラハ」とアルバニアの深い関係

ギリシャにおいて、アロマン人(ヴラフ)の一部を「アルヴァニトヴラホス(Arvanitovlachs / ギリシャ語単数形: Αρβανιτόβλαχος)」と呼ぶケースがあります。この名称は、アロマン人とアルバニア人の歴史的な深い交わりを明確に示しています。

【言葉の構成】アルヴァニテス(ギリシャ国内の古いアルバニア系住民) + ヴラホス(ラテン系住民)  
= アルヴァニトヴラホス(アルバニアに起源・深い関わりを持つラテン系住民)

### ① 地理的ルーツと歴史的背景

彼らの故郷は、現在の南アルバニア(特に「フラシエル(Frashër)」という村の周辺地域)の山岳地帯です。バルカン半島がオスマン帝国の支配下にあった時代、この地域のラテン系(アロマン語話者)コミュニティは、周囲をアルバニア人コミュニティに囲まれて暮らしていました。そのため、彼らは第一言語としてアロマン語を話しつつも、日常的にアルバニア語を話し、アルバニアの文化的影響(服装、社会習慣、多声合唱のスタイルなど)を強く受けました。

### ② ギリシャへの移動と名称の誕生

その後、戦乱や厳しい環境を避けて、彼らは現在のギリシャ北部(イピロス地方やマケドニア地方)やテッサリア平原へと南下・移動していきました。移住先のギリシャ人から見ると、彼らは「ラテン系

の言葉(ヴラフ語)を話すが、アルバニアの言葉も話し、アルバニア風の衣服をまとった人々」であったため、「アルバニア系のヴラフ」という意味でアルヴァントヴラホスと呼ばれるようになったのです。自らをアロマンと認識していますが、歴史的な隣人であるアルバニア人との長い共生が文化や呼び名に刻まれています。

## 6. 圧政からの逃避と国境守備の「募兵」：東セルビアのヴラフ人

「ヴラフ」と呼ばれる人々の中で、音楽やダンスの愛好家にとって外せないのが東セルビア(ティモク地方など)に住むヴラフ人(Vlasi)です。彼らの歴史を紐解くには、「現代の国境線が存在しなかった時代」の周辺国の激しい覇権争いと、そこで行われた「募兵(兵士の募集)」の歴史を知る必要があります。

### ① 当時は「ルーマニア」も「セルビア」も国として存在していなかった

彼らが移住した 17 世紀～18 世紀、現代の「ルーマニア」や「セルビア」「ブルガリア」という独立国家はまだ誕生していません。当時のバルカン半島周辺は、以下の三大勢力がぶつかり合う巨大なチェス盤でした。

- ・ オスマン帝国(トルコ)：バルカン半島の大部分を直接支配。ドナウ川の北側にあるワラキア公国・モルダヴィア公国(現在のルーマニアの母体)やオルテニア地方も、オスマン帝国の緩やかな支配下(従属国)にあり、過酷な重税と圧政に苦しんでいました。
- ・ ハプスブルク帝国(オーストリア)：北方のハンガリー王国を統合し、オスマン帝国と激しく衝突しながら南へと領土を広げようとしていました。
- ・ 居住地の関係：ドナウ川を挟んで、北側が「ラテン系の世界(現在のルーマニア側)」、南～西側が「スラヴ系の世界(現在のセルビア・ブルガリア側)」という地理的關係でした。

### ② なぜドナウ川を渡ったのか？「圧政からの逃亡」と「自発的移住」

前述の通り、当初はオスマン帝国の厳しい支配や、帝国が送り込んできた統治者による過酷な搾取(重税)から逃れるため、多くのラテン系農民が着の身着のままドナウ川を渡り、セルビア東部の深い山林へと命がけで逃亡・定着しました。移住の形態は「命がけの逃亡移住」から「積極的な経済移住」まで様々でした。

### ③ ハプスブルク帝国による「募兵(軍事境界線への入植)」

この移住をさらに加速させたのが周辺国(特にハプスブルク帝国)による「募兵」と土地の提供でした。ハプスブルク帝国はオスマン帝国との戦争中、一時的に現在のセルビア北部～東部の一部を占領しました。ハプスブルク家にとって、オスマン帝国と接する国境地帯(軍事境界線)の防衛は最優先事項でしたが、相次ぐ戦乱でその地域の人口は激減していました。

そこでハプスブルク帝国は、ドナウ川の対岸(オスマン支配下のワラキアやオルテニア)にいるラテン系住民に対し、「ドナウ川を渡って我が帝国の領土(セルビア側)に來い。兵役(国境守備)に就くことと引き換えに、自由な土地を与え、一定期間の税金を免除し、宗教の自由を保障する」という条件

を提示して積極的に兵士・入植者を募集(募兵)したのです。この政策に応じ、多くのラテン系住民が自由な暮らしを求めて自らの意思で集団移住を行いました。

#### ④ その後の複雑な帰属意識

その後、ハプスブルク家が撤退して再びオスマン支配に戻り、やがて 19 世紀に「セルビア王国」が独立すると、彼らはセルビア国家の臣民となりました。彼らはセルビア側から与えられた土地で生き抜いた歴史を持つため、後世(19 世紀後半)になって誕生した「ルーマニア」という国に対しては「そこは自分たちの故郷ではない」という感覚を持ちます。これが、彼らがルーマニア人としてのアイデンティティを持たず、「私たちは歴史的にこの土地に根づいた独自の『ヴラフ(Vlah / Vlasi)』であり、セルビアという国の一部である」という強いこだわりを持つに至った歴史的真相です。

東セルビアのヴラフの音楽や踊りは、信じられないほどの超高速ステップ(Vlaško Kolo など)や神秘的な呪術儀礼に根ざしたメロディなど、ルーマニアの力強さとセルビアの情熱が融合した、バルカン屈指のエキゾチックな魅力を持っています。

## 7. 隣り合う羊飼い:「サラカチャン」と「カラカチャン」

バルカン半島の伝統文化を見ていると、アロマンと並んで「サラカチャン(Sarakatsani)」、あるいはブルガリア側で「カラカチャン(Karakachani)」と呼ばれる人々が登場します。彼らはアロマン人と物理的にほぼ同じ山岳地帯(ギリシャ北部のピンドス山脈やロドピ山脈など)に隣り合わせ、あるいは混ざり合って居住していました。

- 呼び名の違い:ギリシャ側の呼び名が「サラカチャン」、ブルガリア側での呼び名が「カラカチャン」ですが、これらは同じ民族を指します。
- アロマンとの共通点と違い:伝統的な茅葺きのテントの形、羊のチーズ作り、厳格な家父長制の社会、そして美しく重厚な黒を基調とした民族衣装や音楽の雰囲気は、アロマンと非常に酷似しています。しかし、アロマンはラテン系(アロマン語)であるのに対し、サラカチャン(カラカチャン)はギリシャ系(ギリシャ語の古風な方言)を話すという、言語的ルーツの決定的な違いがあります。

## 8. 現在のアロマン:ギリシャ周辺とルーマニア国内の関係性

現在、アロマンの人々は「ギリシャ周辺(故郷のバルカン南部)」と「ルーマニア国内(ドブロジャ等)」に大きく分かれて暮らしていますが、その帰属意識や関係性は大きく異なります。

- ギリシャのアロマン人:高いギリシャ帰属意識。ギリシャに住むアロマン人の多くは、「自分たちはアロマン語というラテン系の言葉を話すが、アイデンティティは 100%ギリシャ人である」という強い帰属意識(ギリシャ・ナショナリズム)を持っています。歴史的にギリシャ独立戦争などで活躍した英雄にもアロマン系が多く、ギリシャ国家への忠誠心が非常に高いのが特徴です。
- ルーマニアのアロマン人:独自のアイデンティティ。一方、ルーマニアに移住したアロマン人は、ルーマニア社会に完全に溶け込み、有名サッカー選手(ゲオルゲ・ハジなど)を輩出するほど活躍しています。しかし彼らは、「ルーマニア人とは異なる『アロマン(アルーマニア)民族』としての独自

のアイデンティティ」を強く保持しており、近年では少数民族としての権利を求める運動も盛んです。

- 現在の文化交流:冷戦終結後、国境を越えた文化交流が再活発化しています。ルーマニアのアロマン人の若者や文化団体が、先祖の故郷であるギリシャのピンドス山脈を訪れる「ルーツ探訪」が頻繁に行われています。音楽や踊りのフェスティバルを通じて、国境を越えたアロマン同士の連帯感が再構築されています。

## 9. ギリシャ島嶼部(島々)の「Vlah」と呼ぶ人々

さらに話を複雑にするのが、ギリシャの島々(エーゲ海の島やエヴィア島など)で見られる「ヴラフ」の存在です。島や一部の地方では、「実際にラテン系の言葉話すかどうかに関わらず、山に住む羊飼い、あるいは田舎風で荒々しいダンスや音楽のスタイル」そのものを単に『ヴラフ風(Vlahika)』と呼ぶことがあります。したがって、島嶼部の伝統音楽の解説に「ヴラフの踊り」とあっても、それは必ずしもアロマン人や東セルビアのようなラテン系民族の文化を指すのではなく、「山岳牧畜民の土着的なスタイル」を意味するジャンル名として使われているケースが多々あります。

### まとめ:文化と音楽を楽しむための視点

バルカン音楽やダンスのフェスティバルでこれらの言葉に出会ったら、次のように整理してみてください。

- 「ヴラフの踊り」と言った場合、それはオスマン帝国の圧政から逃れた東セルビアの超高速ステップかもしれないし、ルーマニア系のものかもしれないし、あるいは単にギリシャの島の「荒々しい羊飼いスタイルの踊り」を指しているかもしれません。
- 「アロマンの歌・踊り」と言った場合、それはピンドス山脈の大自然や、南ドブロジャからの引き上げという激動の歴史を背景に持つ、固有の美しいラテン系バルカン文化の結晶です。

彼らの歴史の複雑さや移動の軌跡、そして国境を越えたつながりを知ること、あの情熱的で、どこか哀愁を帯びたメロディやステップが、より一層深く、立体的に心に響くようになるはずです。